校長室だより～燦燦～ №１６６

必死の二年

2020.8.3

「十年一区切り必死の二年」という言葉と出会った。物事が成功するには十年が必要だが、ただ十年があればいいのではない。その間、寝食を忘れた必死の二年がなければ物事は成就しない、という教えである。一心不乱、無我夢中である。

だいぶレベルは下がるが、自分のことで考えてみた。寝食を忘れるほどの必死さがあったかと言われると、甚だ疑わしいが、自分なりに必死になったときがある。

２０代、教員になって２年目と３年目である。１年目ではないところがみそである。誤解を恐れずに振り返れば、教員１年目は先が見えないまま何となく教員をやっていた。だが、１年目も終わろうとする頃に、ふと考えた。「このままではいかん」目の前にいる子どもたちの純粋な目を見ていると、「教員というのは大変な仕事だ。子どもたちの人生に対して責任がある。これは心を入れ替えてやらねば」と考えたのである。「あと２年間、必死にやってみよう。それでだめだったら考えよう」そう決意した。

あの頃は、毎日クタクタだった。日々頑張ってはいたが、「これでは体力がもたない。年を取ってまで続けられる仕事ではない。３０代が限界ではないか」と思ったものである。

３０代、生徒指導の問題が多発する学校に転勤し、最初から生徒指導主事となった。正直、行く前から嫌だった。案の定、次から次へといろいろなことが起きた。すべての情報が生徒指導主事である私のもとに集まってくる。対応しても対応しても追いつかない。「もうだめだ」と何度も思った。朝、学校の入口を通り過ぎて、山に逃げようかと思った日もあった。それも一日や二日ではない。どこかに行きたかった。

どうにかこうにか１年目の夏休みになり考えた。「このままにしておいてたまるか。今に見ていろよ」必死になるつもりはなかったのだが、必死にならざるを得ない状況であった。結局２年間、必死のまま終わった。そして、学校は立ち直り始めた。

４０代、教頭になった。毎日必死だった。仕事の量、役職にかかわる責任など、必死で頑張るつもりはあったが、必死にならないとやっていけない状況だった。２年目になり、先が見える分、多少は余裕が生まれたが、必死さは変わらなかった。そして、３年目になり、だいぶ慣れてきたところで教頭時代は終了した。

５０代、今のところ必死になった２年間はない。精神的には、必死に近いものはあるが、ちょっと違う。５０を過ぎて必死になるのがいいかどうかはわからない。これから、必死にならざるを得ない状況に追い込まれるかもしれない。

こうしてみると、今までに３回必死になったことになる。共通しているのは、すべて人に助けられたことである。出会いに救われたのである。もし、出会いがなかったら、とっくに潰れている。

本校の教員にも必死になった経験をもっている方がいる。そういう人は、辛いこと、苦しいことがあっても、必死になったあのときと比べればたいしたことはない、まだ大丈夫と思えるであろう。

人には相対的にものごとを考える習性がある。必死になった経験がある人は、その後もずっとやっていけるのである。必死になったことがある人は強い。本校の生徒をはじめ若い皆さんも、必死になるときがくるかもしれない。そのときは、決して逃げないでほしい。逃げずに歯を食いしばっていれば、きっと出会いが待っている。